



マッセ・市民セミナー（NPO法人ちゃいるどネット大阪共催）

「子どもは『育ちなおし』の名人
～見えますか、子どものシグナル～」

開催日：平成25年7月5日（金）

会 場：大阪府社会福社会館 401号室





「子どもは『育ちなおし』の名人

～見えますか、子どものシグナル～

広木 克行 氏
(神戸大学 名誉教授)

はじめに

今日は16市町村の保育所、幼稚園、行政関係者を中心に参加されていると伺っています。ほとんどが保育関係の方のようですが、どなたに聴いていただけるかによって話の力点の置き方が大きく違います。中学生の子どもに話す時、保護者に話す時、それから保育関係者に話す時は、内容は基本的に同じであっても、どのような事例を出しながらお話をするか、話をする方も気を遣って準備しなければいけません。今日は保育関係者が圧倒的に多いことを前提に、講演の内容を至急調整しました。

最近「子育て支援」という言葉が当たり前のように使われるようになりましたが、この言葉は私が子どもを授かり育てた時期にはありませんでした。今と同じように保育園も足りず、「ポストの数ほど保育所を」と言いながら、手作りの保育所で、地域で子どもを育てた経験があります。その頃は神奈川県茅ヶ崎市にいましたが、茅ヶ崎市役所に補助金を出していただくよう陳情を行った経験もあります。

その後、保育所に子どもを預けて両親が働くことが当たり前の社会に大きく変わりました。ここ数十年の変化は、子育てに焦点を当てると大変大きなものですが、子どもたちの変化はそれ以上に非常に激しいものがあります。特に家庭の問題、地域社会の問題、その他子どもを取り巻く環境の変化の激しさが、子どもたちの変化として表れているのではないのでしょうか。

そして、子どもを守る最も大切な人である母親や、子育てに関わる両親をどう支援するかを考えることなしには、子どもを守ることが難しいということが着目されるようになってきました。特に欧米、中でも北欧では、子育て支援は「両親学級」という名前で進んできましたが、日本の場合は「両親学級」

という言葉がまだまだ定着していません。その意味では、大きな課題となっているのではないかと思います。「子育て支援」というと、どうしても母親中心にイメージされてしまいます。それはある意味必然ですが、母親が子育てを真剣に行うためにも父親の支援が欠かせないことは誰もが知っていて、そのためには「両親学級」が非常に重要な位置を占めます。全国を見渡すと、これに真剣に取り組んでいる自治体もないわけではありませんが、関西においてはまだまだこれからの課題だと私は思っています。

私が神戸大学にいた頃に、ある産婦人科と提携した経験があります。最初の子どもを授かる時には、父親も母親も初めての体験で大変真剣になります。子どもが産まれる直前にしっかりと両親に話をし、子どもが産まれた直後に新たな決意を持って子どもと出会う時にも両親にしっかりと話をすることに着目した実践です。産科と小児科は別々で連携の取れない場合が多いですが、子どもが産まれ、育て始める時期は、子どもにとっても親にとってもその支援はデリケートで非常に重要です。その時に重要な産科と小児科の連携に着目した子育て支援は、恐らく今後更に重視されてくるに違いありません。私の実践は、ある産婦人科で子どもを授かったばかりのご両親に来ていただいて、子どもの育ちについて私の知る限りのお話をさせていただきました。そして、子どもを授かった後の三か月検診などにもご両親に来ていただき、一緒にお話をしたものです。

子育て支援という言葉は、今お話したようにまだまだ新しい言葉です。その中身はこれからさまざまな実践とその反省を通して、豊かに発展させていかなければいけないものだと私は思っています。そういう状況を自覚しながら、創意工夫を凝らしていくことが現在はとても大事なのではないかと思います。

私は、子育てと子育て支援の制度が生きるためには、やはり現場と行政がお互いに意思疎通しながら、大阪に必要な保育と子育て支援の在り方を追求する気風をつくっていくことが大事ではないかと思っています。法令で決められた制度や条件をどう受け止めるかということも大事な視点ですが、同時に地域の子育てに責任を負う者たちが、自分たちの感じる問題点を軽視せず、お互いに交流し工夫し合いながら、少しでも良いものを生み出して行こうとする精神が大事ではないかと思っています。



1. 子どもたちの変化

今日は「子どもは育ちなおしの名人」というタイトルを付けさせていただきました。これは私の一番新しい本のタイトルですが、そう言いたくなるほど子どもたちの育ちが危機的状況に直面している、と言っても過言ではありません。例えば、「赤ちゃんの時から表情が乏しく、関わっても笑わない、大人を求めない、甘えない子どもが以前より目立ちます」という保育所からの報告をどう読むかは非常に大事なことです。また、「家では手が掛からず良い子なのに、保育所ではべたべたと先生にまわりついたり、友達に乱暴な言動で接したりと、相反する様子を見せる子どもの姿も少なくない」という報告もあります。これらも私がずっと注目してきた子どもの変化の一つですが、それをどう読むか、すなわち、どういう問題としてこのような子どもの状態を認識するかが非常に重要になります。

そして、本日の主催者であるちやいるどネットは、このような子どもたちの変化と政策の動向を踏まえながら、大阪府にふさわしい子どもと子育て支援をいかに工夫し、つくり上げていくのかというお気持ちから、私を呼んでくださったのではないかと思います。

子育て環境の急激な変化が子どもを通して認識できるということが、保育や幼児教育に関わる者たちの実感です。しかし、新聞やテレビなどの報道を見ますと、私が言う子どもの危機、子どもたちの変化が社会問題化するの、思春期や青年期の子どもの言動を通してです。特に少子化の中でも一向に減らない不登校の子どもたちの数、今や対策のために法律さえできている子どもたちのいじめ、教育のプロである学校の先生たちさえ、それを見抜き、適切な指導をすることが難しくなるほどのいじめが変化している現実などを考えると、ここにいらっしゃる皆さんが「いじめ」という言葉からイメージするものと、子どもたちが体験している実際のいじめとはおそらく「違う」ものだという認識で子どもの現状を考えていくことが必要になっていると思います。

今日の子どもたちのいじめは、ある意味で非常に残酷だけでなく、一種の遊びあるいはゲームと化しています。その中でいじめられている一人の子どもは死に至るまで苦しみ抜くのです。でも、加害者はいじめたつもりなど全くなく、「なんで死んだのか」とあっけらかんとしているケースも報じられています。いじめとは一体どうなっているのかということですが、不登校やいじめだ



けが問題なのではありません。

今、学校の中には、友達をなぐったり蹴ったりする、いわゆる荒れた子どもたちだけでなく、自分自身を責めて多動になったり、パニックになったり、落ち着かないという子どもたちも増えています。それが小学校1年生で現れた時には「小1プロブレム」と言われ、小学校の中学年、高学年で現れると「学級崩壊」を引き起こす子として問題になっていきます。そして、中学校で落ち着かない子が現れると「中1ギャップ」と呼ばれて報道されたりします。しかし、子どもたちに起きていることは一体何なのか、子どもは何を訴えているのかは必ずしも明らかにはなっていません。私の主な研究対象はここに 있습니다。不登校や暴言・暴力、自殺未遂や自傷行為で苦しんでいる子どもたちと話をし、同時に身を切るような苦しさを感じているその両親たちの相談活動を行い、話を伺いながら一緒に子どもの言動の意味を探っていくことが、私の専門としている仕事です。

不登校をはじめとして、今、例に出した問題が思春期の子どもに現れていることについて、社会的な認識・認知は相当深まっていると思います。そうした状況の中で、私が幼児期の教育や保育にも関心を持たざるを得なかったのは、既に幼児期の子どもに問題が現れているのに、幼児期の問題はなぜか社会問題化しないからです。

幼児期の問題は、ともすると親の責任や、家庭の責任を問うだけで済まされており、なかなか社会問題化しません。だから、保育や幼児教育に関わっている専門家の中でも、親の問題と捉えて分かったつもりになる傾向があります。もちろん親の問題は避け難いものですが、なぜ親がそうなるのかを考えていくと、親を問うだけでは済まない構造的な問題が見えてきます。しかしそこまで深めて考えることは決して簡単なことではありません。幼児が示すのはまさに育ちの危機です。幼い子どもたちの困難を社会問題として捉えることは、日本の社会ではまだ簡単なことではないのですが、そのことから皆さんにお話ししていかなくてはなりません。

実は、幼い子どもたちの問題をしっかり捉える目を持って初めて、思春期で起きている問題がよく分かるようになります。なぜ思春期の子どもたちが暴れたり自分を傷つけたりするのか。そうした問題の根っこが、まさに幼児期からの子どもたちの育ちの中にあるからです。幼児期の育ちは、人間のいわば





土台です。樹木に例えると根っこに当たるものです。そこから養分を吸い上げます。根っこが枯れると、木全体が枯れてしまいます。幼児期にどのような体験をし、どのような関係を育て、どのような力を育てるのがしっかりと見えていると、思春期の子どもたちの叫びにも似たような言動の意味を少し読み取ることができます。それゆえに幼児保育の現状の分析は、今、非常に重要な位置に立っていると思います。親たちの責任を問う前に、子どもの言動の意味に目を向けながら親を励まし、子育て支援の課題を捉え直していくことが、子どもに関わる我々に今問われていることではないでしょうか。

2. 子どものうつの増加について

例えば、子どもたちが示すシグナルの中には、表情が乏しいなど、保育所からいろいろな報告があることを先ほどご紹介しました。最も新しい情報の一つですが、今、「あまちゃん」というドラマを放送しています。それが終わると「あさいち」という番組があります。私も退職して、それを見られる身分になったので、一通り目を通して、子育て中の世代の人たちがどんなことを感じ、考えているのかを知る材料の一つにしています。そういう情報に触れることで若い親たちの話が今まで以上に分かるようになるからです。

自分の若い頃の体験をベースにして話しても、話が食い違うだけです。食べ物一つにしても、一方でテレビの情報をも頭に置きながら、若い親たちとの話の糸口を大事にしたいと思っています。私は人の話を聞くこと、カウンセリングすることを仕事にしていますが、私にとって聞くということは書くことなのです。お話を伺いながら、ずっと書いていきます。それが大事な資料になっていくからです。「あさいち」で話されたことで関心のある話題については、その要点を全部書いています。

今年の5月29日のテーマは「子どものうつが増えている」でした。今、小中学生を合わせて、子どものうつがどのくらい増えているか、皆さんご存じでしょうか。これも現在、社会問題化しつつありますが、子どものうつ、正確に言いますと、うつ病の前の状態にある「抑うつ症状」の子どもは約4人に1人です。小学生の場合は8人に1人くらいになります。小学校に入る前の幼児期のデータはまだありません。しかし、私の知る限り、頂いたFAXに書かれた「赤ちゃんの時から表情が乏しく、関わっても笑わない。大人を求めない」という報告



からも、何と寂しい子どもたちだろうと思いながら、そこには明確な抑うつ的な雰囲気を感じています。子どもたちの中に、人と接したり、人を求めたりすることよりも、むしろ孤立・孤独の道へ自ら入っていく子が出ているのです。こうした抑うつ症状の子どもたちの特徴は、まず孤立しがちなこと、人との関係を求めることが非常に難しくなっていること、そして、朝、なかなか起きられないことなどです。友達から関わられたり、保育士が関わろうとしたりすると、イライラして暴言を返すこともあるそうです。そして、親が心配している尋ねても、ほとんど話をしようとはしません。

こういう子どもたちの状態について、「あさイチ」に出演された川崎医科大学の児童精神医学の専門家である青木先生は、「朝起きられない、イライラする、人と関わらない、親に何も話さないといった子どもたちの様子を見て、子どもたちに抑うつ的な気分があることは誰も想像しない。だから、子どもたちの問題を抑うつ的な問題として捉えることは、日本ではまだまだ根付いていない」という趣旨のことをおっしゃっていました。そして、この抑うつ的な子どもが生まれる背景に触れて、「両親の仲が悪く、お酒による喧嘩などが子どもの前で演じられると、子どもはそれにどう関わったらいいか分からず、じっとしているしかなくなってしまふ」となかなか深刻なことを言っていました。

こういう家庭は、今、決して少なくありません。子どもの心理を考えたことがある方はご存じかと思いますが、両親が目の前で何やら険悪な雰囲気を漂わせていると、子どもは感性の生き物なので、それを敏感に感じます。その時子どもが何を感じているかを考えてほしいのです。敏感な子どもの多くは「自分が悪い子だから、お父さんとお母さんはけんかをしている」と感じます。なぜなら、そういう狭い人生体験しかないからです。それ以外に比較する事象、問題に出合ったことがない子どもたちは、自分が良い子であればお母さんもお父さんも笑顔になると感じています。一方、自分が悪い子の時には両親はとても渋い顔をして、機嫌が悪くなるということも経験しています。その経験の範囲で、子どもは全ての事象を解釈します。両親の仲が悪い、その緊張した雰囲気は「自分が悪い子だから」と思い、「よい子」を演じようとするのです。賢い子どもは本心を抑圧して甘えもせず、わがままも言えず、そしておとなしく静かな子になっていきます。

こうした賢い子どもは年長近くになると、「家族が駄目になったらどうしよ





う」と考えるようになります。幼児がそんなことを思うわけがないと思っている人は、幼児が大変賢い生き物だということを見過ごしているのです。子どもは実によく物事を観察しています。ただ、限られた体験の中でそれを判断しようとするので、自分を責めるし、親に全てを託して生きているので、家族が壊れることに恐怖を感じているのです。こうして家庭の問題に凝縮して想像する感性を持つが故に、子どもたちは抑うつ的な状態になっていく可能性があるということを青木先生はおっしゃっていました。

10年ほど前、子どものうつの問題が最初に報道された時には、「サイレントベビー」という言葉がよく使われました。皆さんは聞いたことがありますか。赤ちゃんは0歳から泣くことで自分の要求を示します。だから泣くのは赤ちゃんの仕事と言ってもいいくらいです。この「泣かない赤ちゃん」は人間の育ちとして実に深刻な問題であるとして、小児科医の柳澤先生が「サイレントベビー」という言葉を提案したのです。それは30年以上前のことですが、サイレントベビーがなぜ生まれるかについても、さまざまな論文の中で説明されています。皆さんは「サイレントベビー」が何によって生まれるかご存じですか。柳澤先生は端的に「紙おむつの登場がこの問題を引き起こした」と書いています。

紙おむつが登場する前は、家庭の中で子どもを育てる人が多数でした。3歳までは親が育てた方が幸せだという三歳児神話が、今なお、まことしやかに語られている日本社会ですが、当時も狭い部屋で親が子どもと向き合っていて育っていました。そこに便利な紙おむつが登場したのです。最初は高かったのですが、次第に安くなって誰もが使えるようになってきました。

その頃柳澤先生が実施された調査では、紙おむつを1日に取り替える回数は平均7.5回でした。布おむつの時代は、母親が子どもに関わって布おむつを替える回数は20～25回でした。それが、非常に新陳代謝の激しい子どもが1日におしっこをし、うんちをする回数だからです。布おむつの時代にはたくさんのおむつが軒先に掛かっていて、「赤ちゃんがいる。子育てを頑張っているな」ということが誰にも分かりました。しかし、今は布おむつが掛かっている家を探すのは大変です。おむつを取り替える回数も3分の1に減りました。そして、柳澤先生のデータで一番少なかったケースは1日に平均3.5回でした。子どもも不快でしょうね。3.5回まで省力化するとすると、おむつにいっぱいたまって、



パンパンの状態でしょう。そんな子育てが可能になったことは、紙おむつの登場なしには考えられません。吸収力が強いので、3.5回でも大丈夫だろうとなったのでしょう。

柳澤先生は、サイレントベビーの出現は紙おむつによって、母と子のスキンシップが大幅に減ったことと関連していると考えられると述べ、母と子のスキンシップを増やすことが大事だと言っていたのです。私はこの意見に大変触発されて、本当にそうだと思いました。ただ、この問題を考えていくうちに、それだけではない問題が見えてきました。おむつの交換が約20～25回から7回半くらいに減ってしまう、ひどい場合には3回半くらいまで減ってしまうということは、親子関係そのものが変質したことを意味するからです。

布おむつの時は、なぜ20～25回もおむつを交換したのでしょうか。それは子どもが泣いた時に、「おむつかな？ ご飯かな？ おなかが減ったのかな？ むずがゆいのかな？」と、とにかく泣き声にこたえて親は子どもに関わっていたからです。子どもが泣いて求める、その時に親が家事の手を休めて子どもに関わることが、20～25回あったのです。7.5回や3.5回はどうかというと、子どもが泣いていても「まだ大丈夫なはずだ」と思って自らの手は休めません。とにもかくにも自分の仕事が一段落するまで、子どもに関わりません。だから7.5回で済むのです。子どもに関わるのは自分の仕事が一段落ついた時で、子どもが求めている時ではありません。その時に「どれどれ、ああ、こんなにいっぱいおしっこしたのね」と言って取り替えるのは、子どもの求めに親が応えるという応答性が欠如している状態です。紙おむつはそれを可能にしました。

子どもは自分の要求を泣き声で表します。子どもを授かった親は、乳飲み子を育てながら母親になり父親になるわけですが、それは乳飲み子の要求に応えること、すなわち自分のリズムをいったん止めて子どもに関わる「応答的な関係」を作ることによって可能になっていたのです。大人の生活のリズムと子どもの生活リズムは全く違います。その二つのリズムを調和させるには、親が自分の生活リズムをいったん止めて子どもに関わり、そして、おむつがきれいになって子どもが泣かなくなってから、自分の仕事に戻るしかありません。こうして自分のリズムと子どものリズムを調和させることが、母になることであり、父になることでした。しかし今日、乳飲み子のリズムと自分のリズムを調和させる必要はほとんどなくなりました。なぜなら、子どものおしっこは紙おむつが吸





収してくれるので、自分の仕事が一段落して手が空くまで子どもに関わらずとも済むと考えているからです。

こうして、いつの間にか親子関係の発達は、子どもの要求に親が応えることから始まるという原点を失って、親の「自己中心的関係」に終始するようになったのです。たかが紙おむつですが、それが親子関係を非常に大きく変えてしまったのです。サイレントベビーとは、スキンシップの不足だけでなく、泣いても誰も応えてくれない関係を経験する中で、子どもが要求することを止めてしまう状態と考えることが出来ます。これは科学技術の成果である「便利さ」がもたらす副作用の深刻な例と言えますし、今日、この問題は幼児期の子どもにまで抑うつ的な症状が現れていることと関連づけて考える必要があります。精神科医がこの関係を認識するようになったことの重要性を改めて思わざるを得ません。

北海道大学医学部の児童・小児うつの専門家である傳田先生が、今から7年前に、抑うつ症状を抱えた中学生が23%もいるというデータを出して注目されました。今日では小中学生を合わせて4分の1と言われていきますから、もっと増えていることになります。このように、子どもたちの抑うつ症状がすさまじい勢いで増えていることは、今日の子どもたちが危機的状況の中で育てられていることを示しています。

この問題については厚生労働省も非常に心配しています。3月29日の朝日新聞の夕刊に、子どもへの抗うつ薬の使用は注意すべきだという指示が出たという小さな記事がありました。これはとても大事なことです。脳が形成途上の幼い子どもたちに、脳に直接働く抗うつ薬を処方してよいかどうかは大問題だからです。今まで子どものうつをあまり経験してこなかった日本の精神科医たちは、症状を軽くしてあげようと思って薬を出してきました。しかし、その副作用がなかなか重いのです。そういうことも分かってきて、子どもの抗うつ薬はできるだけ使用を控えて、使用する場合も微量にして、基本的には親とのカウンセリングや子どもの様子の観察などに重点を置きながら治療していかなくてはいけないという指示が、厚生労働省から出たということです。ということは、それだけうつ症状の子どもが多くなっているからに他ならず、副作用の問題が多く出ていることを私たちに教えてくれていると考えることができます。

3. 情報化社会が生み出す子育てグッズ

子育てに関する情報をいろいろと調べていて最近知ったのは、『3歳までにやっておきたい育児法ベスト30』という本が出ていることです。読んでみると少し胸が苦しくなる本です。そこに出て来る表題のほんの一例ですが、「携帯を育児に活用、おすすめのスマホ育児アプリ」と書かれています。今のスマホはアプリが次から次へと開発されていて、育児用のスマホアプリがたくさん出ています。例えば子どもの「泣き止み」というアプリを活用すると、赤ちゃんがびたっと泣き止みます。それから「赤ちゃん泣き声翻訳アプリ」というものもあります。赤ちゃんの泣き声をスマホに聞かせると、「おなかがすいたんだ」「おむつが気持ち悪い」などと翻訳されて分かるというのです。これを使えば、親は子どもから学んで母親になる必要はありません。スマホのアプリが翻訳してくれるわけです。以前の母親は子どもに関わり、その泣き声を聞きながら「これはおむつだな」「これはちょっとむずがゆいのだな」「抱っこしてほしいのだな」というように、その意味を察知する力を自然と育ててきました。それはまさに母親の必死さが生み出す素晴らしい学習力ですが、親が母親に育つそのようなプロセスが、今日はITを活用した育児グッズによってどんどん浸食されているのです。

こうして今日は急速に親と子の触れ合いや親と子の愛着関係を育む関係がむしばまれています。私たちは、これを親の責任問題として済ませるわけにはいきません。手軽に手に入る育児書に「スマホを育児に活用、おすすめスマホ育児アプリ」などと紹介されていて、それを活用しているだけです。「みんながやっているのだから」という感じで、お母さんたちはこれを育児に取り入れています。親にとっては楽で便利だからです。泣かれて困っている時にそれを使えば泣き止み、泣き出した時にそれを使えば、何を要求しているかを教えてくれるわけですから、こんな楽なことはありません。

親たちの悩みはそれ以外にも山ほどあります。遊んでいてなかなかご飯を食べない子、いくら寝かし付けようと思ってもなかなか寝ない子、全く言うことを聞かない子など、子どものことで悩んでいる親はたくさんいます。その親たちを応援するアプリも出ているのです。先日、神戸新聞にも載っていましたが、「鬼から電話」というアプリがあります。私もつい最近知って、実際に見せていただきました。言うことを聞かない子どもにスマホの電話がかかってきま



す。「あなたに電話よ」と言って通話ボタンを押して渡すと、赤鬼が「言うことを聞かないと、鍋に入れて食べちゃうぞ」と迫力満点の声で言うのです。その着信音だけで、おとなしくなる子どもがいるほどだそうです。

これは脅しによる育児の一種です。子どもはとても聞き分けが良くなって、すぐに言うことを聞きますし、すぐにわがままを止めます。食事は遊ばずにちゃんちゃんと済ませます。一言で言うことを聞きます。スマホの中に人鬼がいると思っているかは分かりませんが、とにかく自分に電話がかかってくると鬼が怖いことを言うわけです。即効性がある非常に便利ですが、このような便利さが親子関係をむしろ壊します。子育てはそんなに簡単なものではありません。その子育てを簡単なものにするのがIT育児グッズです。それが今や情報化社会の中で相当進化していて、親と子の関係の育ちをむしろ壊しています。

保育や子育て支援に関わっている多くの人たちが「どうしてだろう」と感じている子どもの変化は、親子関係の変質とともに急速に広がっており、それが保育や幼児教育そして子育てに、非常に深刻な問題を引き起こしていることを知っていただきたいと思います。

4. 保護者と園の関係

ある幼稚園に行きました。そこで聞いたのは担任の若い女の先生を独り占めして、友達が近寄ってくると蹴りを入れるすごい子どものことでした。年中クラスの子でも、先生にべたべたくっついて、友達が近づいてくると「来るな！」と言って蹴りを入れる子です。その子どもの様子について、担任の先生が私に相談してくれたのです。その先生が園長と一緒に話してくれたのはこんな話でした。

一少し前に、この子は何かに困っているに違いないと考え、何とかご両親とも相談しながら問題解決の方法を探ろうと思って、お宅に伺ったそうです。そして、「園で子どもがちょっと寂しそうな様子なのですよ」と話し始めた途端、お母さんがとても強い口調で「うちではとても聞き分けのいい子です。幼稚園の指導力のなさを棚に上げて、親を批判しに来たのですか。お帰りください」と怒られて、帰らざるを得なかったとようです。その数日後、退園届の手紙が届いたそうです。

その母親は、子どもに何かがあれば自分が批判されるとあって、よろいかぶ





とに身を固めた厳しい気持ちで聞いたのでしょう。それが退園届に至ったのだなと思いつつ話を聞きました。話が一段落したところで園長と担任の先生は、「私たちのやり方のどこがまずかったのでしょうか」と尋ねていただきました。

皆さんは、こういう園長や先生の言葉をどう受け止められるでしょうか。私は今までのカウンセリングや教育相談の体験から、まず、この園長先生は勇気のある先生だと思いました。自分たちが一生懸命やったことがうまくいかなかった時に、そのことをさらけ出して相談することは大変勇気が要るものです。何も悩みがないかのように、「うちの園は素晴らしい教育をしているのに、親に問題がある」と言って済ませる園や先生たちは少なくありません。しかし、この園長先生は子どもや家族に見られるいまだかつて経験したことのない問題に直面して、そのことをどう克服していけばいいかということ、担任と一緒に相談して下さったのです。その姿勢に私は感激しました。その退園届けの件が非常につらかったのでしょう。本当はその子にとって良い方法だと思ってやったのですが、正反対の結果になってしまった。そのつらい経験から何か教訓を得ようとして率直に相談して下さったのだと思います。次にもしも同じような経験をした時には、子どもを救える自分たちでありたいという気持ちから出た相談だと思いました。子どもの利益を最優先する本当の専門家の姿を見た私は思ったのです。そこで私は「一つの参考意見に過ぎませんよ」と断りながら、ない知恵を絞って次のように話しました。

—お話を伺って、先生たちの訪問にお母さんが身構えたのも分かります。子どもに何かがあったことを直感しながら、しかも担任が園長先生と一緒に訪ねてこられたのですから、「何かあったのかな」とまず身構えます。子育て支援はそういう親の気持ちを考えることなしにはできません。つまり子育て支援で何よりも大事なことは、第一ボタンを掛け違えないことです。第一ボタンとは、子どもにどのような問題が現れているとも、その親と園の間に信頼関係を築くことです。信頼関係なしに、どんなに正しい助言をしたとしても、それを聞く親からすれば、それは自分への批判にしか聞こえないのです。ですから、子どものことがいかに心配であっても、まずはそのお母さんと信頼関係を築くという第一ボタンをしっかりと掛けることから始め、それを確かめながら具体的な問題を話していくことが大切です。その流れを頭の中に描いて、信頼関係を





築くことを優先した関わり方が必要ではないかということです。

—そこで次に問題になるのは、保育者または教師と親の間に信頼関係を築く上で特に大事なことは何かということです。どんなに問題のある行動をしている子どもであっても、まずはその子の1日、あるいは1週間をじっと観察することです。観察していれば、とても素敵な面がたくさん見えてきます。今日はお昼寝がよくできた、今日のご飯をたくさん食べてくれた、今日はいつものは遊ばないあの子と遊んでいた。子どもはいろいろな姿を見せてくれます。そういう昨日とは違う今日の、1週間前とは違う今日の、その子の輝く新しいところをしっかりとつかんで、それを日々親に伝えることです。先生にべたべたくっついてくることを本当は伝えたいのですが、それを言うにはやはりタイミングが重要で、機会を選ばなければ親には伝わりません。ですから、それはそれとして受け止めながら、その子どもの良いところ、素晴らしかったところをきちんと親に伝えていくのです。親は「この先生は子どものことをよく見てくれる」と感じ、信頼関係が生まれていくからです。そして、「何か心配なことがあれば、いつでも相談してくださいね」という一言をきちんと親に伝えていくのです。この関係づくりこそ、本当は年度初めの一番大事な園の仕事です。

一人ひとりの親との信頼関係がある程度築けて、先生や園長先生との立ち話も少しずつできてきて、やがて落ち着いてきたら、「ちょっと一つ気になることがあるのですが、聞いてもいいですか」とお母さんに尋ねれば、お母さんがすぐによろいかぶとに身を固めることはなくなるに違いありません。「家で何か心配事があれば、いつでも相談してくださいね」と伝えて親との関わりをつくりながら、第一ボタンをきちんとはめて、その次の課題へ進むことを意識的に取り組めば、突然退園届を送ってくることはなくなり、親と園は強い繋がりをつくっていけるのではないかと思います。問題行動を表出している子どもの育ちなおしを支援する上で大事なことは、親子関係、特に親をどうサポートするかです。子育て支援の質をわれわれが考えていくことによって、子どもの育ちなおしが、より実現しやすくなるのではないかと思います。

幼稚園と保護者の関係について、担任と園長先生にこんなことをお話したのです。



5. 親はみんな無免許運転

お母さんたちにお話しする時は、「私の話を聞いて、自分の考えとちょっと違っているなと気付いたら、気付いた時が出発点です」と言うことにしています。子育ては、みんな無免許運転なのですから、良かれと思ってやっても間違うことは山ほどあるのです。正直に言うと、教育学を勉強して人さまの前で偉そうなことを言っている私も、自分が子どもを授かって育てる時には、振り返ってみると間違いの連続でした。「ああしておけばよかった」「あの時がチャンスだったのに」と反省することがたくさんあります。

保育士や教師たちのように、子どもの発達心理学などを勉強してから親になる人はほとんどいません。みんな、子どもを授かったから親になっただけのことです。周りのいろいろな情報を取捨選択する基準も持たずに、子どもにとって良かれと思ってやっているうちに、いつの間にか難しくなっていくのです。私たちは、親を評価したり批判したりする前に、子育ては無免許運転だからいろいろな失敗があって当たり前、大事なことは「これはちょっと問題かな」と気付いた時に真剣に学び、自分自身の子どもの見方や子どもへの関わり方を見直すことです。少し変えてみようと思いついた時から、親子関係が変わり、子どもが変わっていきます。

大事なことは、少し心配になった時に勇気を出して相談することです。子育てのプロとも言える園長先生や主任先生など、いろいろな方に思い切って相談してごらんなさいと、講演の時にはお話しします。それぞれの園の園長先生や主任の先生など、ベテランの先生たちの力をできるだけ利用するような気持ちで、関わってほしいと親たちに話しています。今、子どものうつつが相当の勢いで増えていると話しましたが、その背後にも親たちの孤独と深刻な悩み、子育ての苦悩があることを十分頭に置きながら、保育と教育の専門家は第一ボタンを掛け違わない姿勢で親の相談に乗ることが大事です。それがまさに、皆さんが専門の保育士であるか、あるいは教師と言えるかどうかを決めるからです。

私は大学院生の頃から、保育士や教師たちの実践報告から学んで来ました。実践から学ばない研究は本当の研究ではないと思っていたので、先生たちの研究会によく参加して、末席で聞かせてもらったのです。その頃は難しくて分からないことが沢山ありました。先生たちの話の筋を理解するだけでも大変でした。やがてその議論の中に私も加わることになるのですが、それまで5年、10





年と長い時間がかかりました。

先生たちのお話を聞いているうちに、いつも感動的な発言をして下さる一人の小学校の教師に出会いました。なぜこんなふうにも子どもを見られるのだろう、なぜこんなに子どもの気持ちがかかるのだろう、と思いながら、想像力豊かで創意溢れる実践を聞いては感動していたのです。ある日、勇気を出してその先生に「先生の中から見て、プロの教師とはどういう教師ですか」と尋ねてみました。その先生の発想の根拠を知りたかったからです。すると一瞬考えてから、私にこう話してくれたのです。「目の前の30～40人の子どもを担当する一人の教師を考えてみましょう。その子どもたちの短所をすらすらと言える教師はどこにでもいます。でも、30～40人の子ども一人ひとりの長所をすらすらと言える先生はめったにいません。それが言えるようになるためには、一人ひとりの子どもをよく観察しなければなりません。子どもたちに教える時も、食事の時間も、そして休み時間も子どものことを見詰めながら、この子はどこで光るか、どこで輝くかということをしっかりつかんでいる教師こそプロだと私は思います」と。これは私にとって本当に忘れられない大事な言葉になりました。

一人ひとりの子どもの持ち味を見抜くことこそ、まさに第一ボタンを掛け間違えないために大切なことだと言えるのです。それに、子育てはみんな無免許運転なのですから、さまざまな問題があって当たり前です。その親たちと結んだ信頼関係を基にして初めて、親子関係が少しずつ改善され、教育と保育が子どもの力を引き出していくことが出来るようになる。それが子育て支援と結びついた保育、教育と言うことができるのだと思います。

6. 子どもの運動不足

もう一つ強調しておきたい、子どもたちからの深刻なシグナルがあります。

2013年4月8日の神戸新聞に「福島の子育て支援、扁平足2.5倍」という記事が載りました。お分かりと思いますが、東京電力福島第一原発事故後に、土踏まずのない扁平足の子どもが事故前の2.5倍に増えたことが、福島県の保育園の調査で分かったという記事です。一人の園長先生は「原発事故による放射線の影響で、屋外での遊びが制限されたことが関係しているのではないか」と言っています。私も大震災の後実際に、福島、宮城、岩手に行って、小さな子ども

を持つ親たちの話を聞いてきました。私にできることは話を聞くことだけなのですが、そこでいろいろな心配事を聞くことが出来ました。家族が維持できずバラバラになった、お父さんの仕事がなくなった、私の仕事もなくなった、おじいちゃんとおばあちゃんも亡くなった、私はどう生きていけばいいのか、などなど、幼子を抱えた親たちの思いをひたすら聞かせてもらったのです。「大変な生活を抱えながら、よくその辛さを話しに来てくださいましたね」と感謝しながら、辛さを抱えた者同士だからこそ分かり合える共感の場に身を置くことができました。その機会にも子どもの運動不足とストレスの強まりを心配する声を聞きました。

福島や宮城の保育園の先生たちは今日もなお、毎日放射線の線量を計測しています。そして特にホットスポットについては雨の後は線量が高くなり、外遊びをさせられないと悩んでいます。たとえば今日は1時間くらいなら遊ばせられるとか、ちょっと無理だからホールの中で我慢させるなど、遊びを工夫しながら保育をしている様子も見せていただきました。そしてこの記事を見た時に、やはり原発事故による放射線の影響で、福島の子どもの遊びが制限されていることが大きいと思いました。神戸新聞は弘前大学の尾田敦先生のコメントを紹介しています。尾田先生は扁平足や肥満傾向が増えていることについて、「やはり運動不足が原因ではないかと分析している。扁平足だと朝礼で立っていることが難しくなり、集中力が落ちる可能性もある」と述べています。このままでは小学校に入学してから、十分に遊べる地域の子どもたちとは違う弱さを体に刻んで、勉強を始めなければならないということです。私はこの記事を読みながら、福島を始め東北の被災地の復興がいかに重要であるかを、子どもの視点から捉えることの重要性を再認識させられましたが、それと同時に、またそれを超えて、今日の日本の子どもたちに共通する、身体の育ちの問題としても捉え直す必要があると思いました。

ここで一つの例から考えてみたいと思います。先日（2013年12月）のテレビで、ベビーカーに子どもを乗せたままで、当たり前のように電車に乗ってくる親のことが話題になっていました。限られた広さの車内で迷惑を感じている人が少なくないことも取り上げられていました。このベビーカー問題は国会や地方の議会でも取り上げられていますが、私も少し前から気になっていました。しかしそれは周囲への迷惑ということではなく、子どもの身体の育ちに与



える影響の問題としてです。電車や駅のホームあるいはスーパーでも、十分に歩けそうな年齢の子どもまでが、ベビーカーに乗せられたままでも移動しているケースが少なくないからです。そんな親に「歩かせた方がいいのではないですか」と声を掛けたくなる時があります。しかしそれは余計なお世話かもしれません。ひょっとするとその子には歩けない事情があるのかもしれないし、何か困難を抱えているのかもしれないのですから、話しかけたいと思っても、差し出がましくて言えないと思直してプレーキが掛かるのです。しかし、心の中では、やはりこれも子どもの育ちを歪める、楽で便利な育児グッズの一つではないかと思わずにはられません。

もう十分に歩けそうで靴を履いた子どもが、ベビーカーに乗っているのはやはり異常だと思います。子どもたちにとって、日々体を動かすことがどれほど大事か。子どもたちの遊び環境が貧困化している中で、親と一緒に買い物でも子どもが毎日歩くことが体づくりにどれほど役に立っているか。そのことを思うと、扁平足など子どもの発育に現れてくる問題から、しっかりと教訓を学んでおくことが必要なのだと思います。その子どもたちが小学校へ入学してから、授業に集中できず落ち着かなくてさまざまな問題を起こしたとしても、それは当然の結果だと言われてもやむを得ない状況なのではないでしょうか。

こうした子どもたちの問題を見て、「今の若い親は」と問題をすり替えて分かったつもりになるのは誤りです。どうやってより良い子育てをしていくかという視点に立って、親たちとともに子どもの育ちのあり方を改善するために道筋を考え合い学び合う必要があるのです。それが都道府県の条例などで禁止されるようになったら、情けないことです。子育てや日々の親子関係、日常の人間関係は文化や教養の問題であって、条例で制約されてはならないことだからです。子どもの身体や態度などに現れる問題を、子どもからのシグナルとして考えられるように、私たちは自らの教養をもっと磨く必要があると強く思います。

保育士の皆さんと話していると、最近の子どもたちは二足歩行がだいぶ遅くなりはじめているという報告さえあります。「今までは1歳半まではいかなくても、1歳で大体の子どもたちは歩いていましたし、その歩きははじめの頃から言葉が出てくることも、本当に教科書どおりに成長すると感心しながら見ていました。でも、最近は1歳半になってもまだ歩けない子どもがいます」という

話です。これも重大な問題への気づきであり、やはり深い意味があるシグナルをそこに感じとる必要があります。

子どもたちの育ちについて更に丹念に聞いていくと、子どもにとって非常に大事な寝返りを打つという姿勢の転換がなかなかうまくいかない子ども、あるいはそれをしようとしないうちの姿も見られるようです。寝返りを打ったりきちんと座れるようになったり、そしてハイハイをしたり高バイをしたり歩いたりする姿勢の転換は、放っておいて出来ることではありません。幼児期の子どもは好奇心の塊で、観察し、模倣するプロです。子どもは大人の姿やお兄ちゃん、お姉ちゃんたちの姿を見、関わり合う中で、その姿に関心を持ち観察しながら模倣するのです。好奇心から、お座りをしたい、歩きたいという意欲が湧くようです。それこそが子どもの学習や発達の原動力なのですが、その意欲を子どもたちが失っているのではないかと、観察し模倣するのを待つゆとりが非常に貧しくなっているのではないかと思わざるを得ません。ですから、土踏まず未形成問題の背後には、二足歩行や寝返り、ハイハイをしたいと思わない子どもたちの内面的问题があります。昔の子どもはハイハイは、プロのように上手でした。そんなに速く動けるのかと思うほど、ちゃかちゃかとハイハイする子どもを見て実に感心したものです。しかし、最近はハイハイがうまくいかない子もいると聞きます。その子に対してハイハイの仕方を教えるのではなく、子どもの姿と生活からシグナルの意味を読み取り、ハイハイで動きたくなる気持ちを持つて関わりとは何かを、保育の課題として考える実践を追究していただきたいと思います。

7. 子どもの自傷的行為について

今まで私たちは、うつやサイレントという症状に表れるシグナルと、発育に現れるシグナルを見てきました。次に、どうしても抜かしてはならない問題として、「キレる」または「パニックになる」という自傷的行為について見ておく必要があります。乳幼児の自傷的行為は、自分の体をたたいたり噛んだりぶつけたりする行為として現れます。1歳くらいの子どもの場合は自分の頭を柱にぶつけることがよく見られます。周囲の者が「そんなことをしたらけがをするよ、大変なことになってしまうよ」と思うくらいに、子どもたちは自分の頭を柱の角にぶつけたりします。中には、あの柔らかい自分の足や腕を、血がにじむ程



噛んだりする子どももいます。

私が今、非常に重視しているのは、パニックや自傷的な行為、あるいは多動という子どもの行動を見た教師や保育士たちが、安易にそれを発達障がい結び付けてしまう傾向が見られることです。もちろん発達障がいの知識はとても大事なものです。しかし、発達障がいの知識から子どもの状態を評価することには慎重でなければなりません。子どもの状態の意味を知るには、長い時間をかけ、専門の医師、発達診断のプロとよく意見交換をしながら、その子の行動と生活を丸ごと観察して、丁寧に見ていかななくてははいけません。一見、発達障がいの行動であったとしても、それが人間関係のもつれを意味するシグナルである場合や、発育のもつれによる問題である場合もあるのです。

先日、京都で子育て相談会をしました。講演会には200人ほど来られたのですが、子育て相談会には30名ほどのお母さんたちが残ってくれました。相談会が終わろうとした時、1人の若いお母さんが話し始めました。「子どもが塾へ行くのを嫌がって困ります」と言うのです。「お子さんは何歳でしょうか」と尋ねると、「1歳半です」と答えてくれました。また「何の塾でしょう」と聞くと、「英語の塾です」とおっしゃいました。1歳半の子どもが英語の塾へ行くのを嫌がるのは自然です。子どもの感性は正しく反応しているのですが、親は子どもの不快感に関心を示さず、塾に行かない子どもの姿に悩み大変真剣に考えて困っているのです。親は一生懸命です。近い将来、英語教育が始まる小学校で子どもが困らずにしっかりと優秀に育て欲しいと願っているのです。そのお母さんは、どうしたら子どもが塾に行くようになるかを知りたいのですが、それに対する答えはどこにもありません。

そのお母さんの質問を伺って、相談員の私はこんな話をしました。

—まず、すごく勇気を出して相談してくれて素晴らしいと思ったということ。そして、このグローバル社会で生きていく子どもに、賢く育ててほしいと願うからこそ、英語を習わせたいと考えたことが良く分かったということ。それから、賢い子どもに育ててほしいと思わない親はこの世に一人もいないし、その願いは決して間違っていないということです。しかし賢い子どもに育ててほしいと願って、この子のために一生懸命やっているのに子どもが乗ってこない、どうしたらいいかと悩んでしまうと、子どもの心が見えなくなること。正直言って私自身もやはり子どもには賢くなってほしいと思っ



したけれど、そこで気づいたのが、子どもに賢くなってほしいと願ったとしても、どんな方法でも許されるものではないということです。子どもへの願いが間違っていないくても、育てる方法が子どもの心を見無視していると、子どもを傷付けてしまうことがあるからです。

今、子どもが嫌がって言うことを聞かないということですが、それはお子さんが出している大事なシグナルです。興味も関心も湧かないことをさせられるのは、とても不快なことだからでしょう。子育ての情報を見れば、英語の勉強は早い方がいいという宣伝は沢山出てきます。それにあの人もさせている、この人もさせているという話を聞けば、自分もやってあげなくては子どもに悪いのではないかと思うことはよく分かります。でも、日本社会で幼児に英語の勉強をさせるのは、学習心理学という学問の世界では、子どもの言語の発達にとって有害でさえあるという考えが支配的です。こういう情報こそ大切なのですが、それに触れる機会はなかなか無いのです。

例えばヨーロッパのように、ドイツ語やフランス語や英語など、主語があって動詞があるというほぼ同じような文型で話されている言語文化圏の場合、(フランス語は形容詞が後に付くので少し違いますが、それくらいの違いで基本的な文法構造は同じです) テレビなどを見聞きしながら、生活の中で子どもはおのずと言葉を覚えると言われていました。これは文法構造があまり変わらないからできることです。しかし主語を明示せず、述語が最後に来る日本語の場合は、英語やフランス語と文法構造が違います。そういう言語を子どもの発達を歪めずに外国語として学ぶには、何歳くらいから始めた方がいいかは、とても大事なことです。自分を産み育ててくれる母の言葉(母語)をしっかりと身に付け、母語で物事を考えて表現することができるようになってから、文化として外国語を学ぶことが大切ですし、それで外国語は身につくと言われていません。生まれる前からシャワーのように耳で聞いて覚える母語の場合は、最初に言葉を覚えて話せるようになってから、後で文法を学びます。しかし、文法構造が違う言葉を本当に習得するには、音と文法を同時に学ぶことから始めます。そして、文法に従っていろいろと話す練習をしながら、いつの間にか文法を気にしないで話せるようになるという順番になります。音(言葉)を覚え、話し方を覚え、文法を学ぶ母語(日本語)の学び方と、音と文法を覚え、それを応用して話しながら、やがて文法を意識する必要がなくなる外国語とでは、



学ぶ順番が全く違うのです。

文法構造（文化）が違う言語と一緒に勉強してしまうと、子どもの頭の中は質の異なる二つの文化で混乱します。実は今、その混乱によって身動きできなくなった子どもの不登校の相談が出てきています。ある子どもの話を聞いてみると、「僕はこう思う」と（主語をはっきりさせて）言うとは皆から「変な子だ」と言われる。先生や友だちの言うことが分からないから学校が怖いと言います。二つの文化の衝突が起きている訳ですが、異質な者を排除しやすいのが日本社会の特質ですから、子どもは学校に恐怖を感じるようになるのだと思われます。英語の塾を拒否した1歳半の子どものお母さんは、勇気を出して相談したからこういうことを学べたわけですが、子どもの発達と文化の関係について知る術がないまま、幼児期から英語を教え込むのがかなり危険なことだと考える必要があります。

ここで、もう一つの子どものエピソードをご紹介します。それが載った本のタイトルは『なぜ、その子供は腕のない絵を書いたか』です。著者は芥川賞作家の藤原智美さんです。子どもの絵には、子どもの心の育ちが表れます。心が健康に育っている幼児の絵は、何歳かになると頭に手足の付いた人間が出てきます。でも、この本に出てくる子の絵には手が出ないのです。既に高校生になっているRちゃんの幼児期の絵にも腕がありません。

Rちゃんという女の子は、0歳の頃から幼児教室へ通わされ、絵や文字を書いたカードを見て瞬間的に言い当てるフラッシュカードで学び、子守歌は英語のテープ、家中の家具や電化製品にネームプレートを貼り、アルファベット、かな、漢字を覚えさせられました。学習分野はどんどん増え続け、英会話、ピアノ、バレエとほとんど毎日教室通いが続きました。幼児教室の全国テストではいつも上位に入っていて、おかげで5歳の時には小学校で学ぶ全ての漢字と英会話もある程度できていました。

この話を聞くと、多くの人はずごとと思うのです。天才ではないかと思ってしまう。でも文法構造も違い様式も違う文化を幼児期から教え込まれて、Rちゃんはそれらを頭の中で調整出来ていたのか否かは分かりませんが、それが苦しさとともに行動に表れるのは思春期以降になるケースが多いのです。

Rちゃんの変調は高校に入ってから始まりました。精神不安定が非常に激しくなっていき、ついには妹の首を絞め、車のフロントガラスを割り、大暴れの



後、救急車で病院に運ばれます。病院に運ばれてからの、この少女の言動がすさまじいのです。親や医師に食って掛かる言葉がきつく、毒づくにも、その辺のヤンキーとは違って心をえぐるような鋭さがあり、精神科の医者に向かって「医学部の落ちこぼれがなるんでしょ。君こそ精神療法を受けた方がいい、老婆心ながら」と言うのです。母親に向かっては「無力な子どもを自分のロボットみたいにしゃがって。そのロボットが壊れたら、さっさと精神病院へ送り込みやがって。その反省とやらを地獄の底に降りても続けなければいけないのは、この壊れたロボットを産み、そして育てたあんだだよ」と言うのです。とても頭がキレる子です。こういう言葉が続々と出てくるのです。この回転の速い頭脳とエネルギーをそのまま勉強へ振り向けたら、きっと聡明な大人になると思います。しかし彼女は結局、苦しみからの解放を求めるかのように自殺してしまいます。

子どもが文化を身に付けることは、とてもデリケートなプロセスです。パソコンのハードウェアに情報を詰め込むのとはまったく違います。生きた人間の脳は一つの組織で、幼児期には増殖を繰り返している器官です。日々の生活の中で音の中から母語を聞き分け、やがて母語で話し、考えそして書くことが出来るようになる。このプロセスの複雑さと微妙さは今日の科学でもほとんど解明されていません。そして明確な言語構造を持った母語を大体駆使できるようになるのは9、10歳頃と考えられています。その頃から異質な構造を持つ文化を学び始めると、子どもたちは母語をしっかりと駆使しつつ、外国語も自分のものとして獲得できると言われています。小学校からというより幼稚園から英語を教えるところもあると聞きますが、それはよほど慎重でなければなりませんし、学習心理学の専門家からも意見を聞くべきです。「早いことは良いことだ」では済まないのです。人間の子どもの育ちの順番があります。その順番を無視して、あれもこれも早いことは良いことだと思って教え込むことは大人の思い込みであり、調和の取れた子どもの育ちの支えにはなりません。このことを私たち大人はよく学び、考える必要があります。

8. 教育とは

子どもたちの育ちにさまざまな問題が起きていることを、私の話から少し感じていただけたのではないかと思います。私はここで皆さんに次のイメージ





を持ってもらいたいと思っています。私たちがいつも何気なく使っている「教育」という言葉にもっと着目してほしいのです。教育とは「教える」と「育てる」の二つが組み合わさって「教育」です。この二つは違うことですが、それが見事につながった時に子どもの力が引き出されて、素晴らしい人間が育つのです。この「教える」と「育てる」が一つになった「教育」という言葉の意味を、私たちは時々忘れていきます。昔はあえてこんなことを言わなくても、教と育はつながっていました。しかし高度の産業が発展した20世紀後半以降、日本の教育は分裂し始め、情報化社会の今日、その分裂はますます深刻化しています。

振り返ってみると、明治維新の頃「エデュケーション」という英語を日本語にどう訳すかということで時の知識人たちが考えた末に、中国の古典から取ってきたのが「教育」という言葉でした。見事な翻訳です。今日は簡単に片仮名文字を使って済ます知的怠慢が蔓延していますが、当時はそれを日本語、日本文法に合う言葉に換えるために真剣に努力したのです。われわれ自身がこのことをもっと考えなくてはいけないと思います。

その時導入した「教育」という言葉がとてども大事なものは、「教」と「育」の組み合わせとして子どもを自立させる働き掛けを見ていることです。そしてもっと注目すべきことは縦に書いた教育の中で「育」が土台になっていることです。その上に「教」が乗った時に、子どもは教えられたことを理解してきちんと身に付けていく。育つということが教育のまさに根っことしてあるという「教」と「育」の関係を知っていただきたいのです。

ところが、高度経済成長を遂げた20世紀の後半以降、「教」と「育」のこの関係が無視されるようになり、「育」がどんどんやせ細っています。1歳半から英語塾に行かせることは「育」の無視に当たります。「教」は学習、勉強を子どもに求めますが、「育」が求めるのは育つことです。アメリカの幼児教育学会の統一見解では、育ちが主である幼児期は8歳までと言われています。すなわち保育と幼児教育の仕事は育ちを励ますことです。そこで育ったことをベースとして、教を主として働きかけるようになるのが大体9歳くらいからです。小学校低学年では楽しく活動し、子どもたちが自らの心身の育ちとともに、さまざまな文化を吸収することに喜びを感じるようにする。それが8歳までの「育」をメインにした教育です。それが「教」を中心としたものに徐々にシフトしていくのが、教育の本来の意味です。保と幼児教育は、「育てる」こ

とがメインでなければなりません。

あえて言えば、「教える」とは子どもの一步前に出て導くことですが、「育てる」とは一步下がって子どもの育ちを支えることです。本質的に方法が違うのです。特に保育の場合は生活そのものですから、生活の展開を通して関わっていくことが大切です。そういう意味で私は、保育士は子どもが育つことを支えるプロだと思います。そして小学校、中学校、高校の先生は教えることのプロです。これは明らかに専門性の違いです。だから保育士が小学校に行っても十分な授業はできませんが、小学校の先生を保育園に連れてきて、今日1日保育をしてくださいと言ってもできません。それは教師が「育てる」という、一步下がって子どもの育ちを支え続ける専門家ではないからです。

「教」のプロと「育」のプロは違うということです。近年、この違いを無視する政策が政府から出され、「育」をどんどん抑圧して子どもたちの早期教育が大流行しています。

そうした状況の中で、私たちは子どもの育ちを支える保育という仕事の大切さを、もっと声を大にして発信していかななくてはいけません。少し考えてみれば分かることですが、「育」の時代は人間の一生を支える土台を形成する時期です。だから「教」は、その土台である「育」に支えられなければ、その素晴らしい機能を発揮することは難しいのです。腕のない絵を描いたRちゃんの場合もそうでしたが、小学校に入る前の6歳で英語ができ、小学6年生のような読み書きが出来るのが天才のように見えるのです。それは建物の上屋が建っていて見えるのと同じことです。しかし、私が一番強調したいのは、育ちは目に見えない土台なのだと言うことです。

Rちゃんのケースは土台をしっかりと築かず上屋を建てたのに似ています。最初はきれいな建物に驚き天才のように見えますが、時とともに沈下していきます。しかも、弱いところから先に沈下していきますから、やがて建物は歪んで崩れていくのです。医師やお母さんに対するRちゃんの言葉は、大変悲しいですが必死の抗議のように聞こえます。そして最後には生きていくことすらできなくなってしまうのです。この子の苦しさを理解する上で、土台の弱さともろさ、そして精いっぱい建てた上屋が歪んでいく苦しさというイメージは重要なものだと思います。もしもこの土台が幼児期にしっかりと育っていれば、その上に小学生という平屋が建ちます。中学生になってから2階を建て



増すかもしれません。高校生になると3階建てに立て直すかも知れませんが、ひょっとすると大学生や大学院生にまでなってビルのような建物を立てるかも知れません。土台の「育」の大切さを知って育てていれば、どこまで上屋を建てていっても沈むことはありません。そんなイメージで「教」と「育」の関係を捉えた時に、育てるという保育の仕事の大切さと重要性、そして子育て支援の大切さがよく分かってくるのではないかと思います。

今日のテーマである「子どもの育ち直し」とは、「教」が先行した子育てによって「育」がやせ細っている状態の子どもの「育」のやり直しを、ゆっくり慌てずにやりましょうということです。特に幼い時期に子どもが苦しみのシグナルを出して、親がそれに気がつけば、子どもの育ち直しは比較的早く始まります。私が今まで支援した育ち直しで本当に難しかったのは、大学2年生の事例です。国立大学に入学した大変優秀な学生でしたが、彼女は2年生になって大学へ行けなくなり、そして、お母さんに「ママ、ママ」と甘えはじめました。19歳の女性は何歳の心に戻って甘えているのか、精神科医に精神鑑定をしてもらったところ、その学生の精神年齢は3歳半くらいだということでした。親がその子を賢く育てようと思って先回りをし、「教」があまりにも肥大化し過ぎたために、彼女は自分の土台をしっかりと作ることが出来なかったのだと思います。彼女はやはり幼児期まで戻って育ち直しを始めたのです。

今、私が取り組んでいる研究は「育ち直しの教育学」ですが、育ち直しは子どもだけの問題ではなく親の育ち直しとセットの問題です。そして保育士の皆さんが育ち直しを支援することの大切さを理解することが、親と子の育ち直しを早い時期に可能にする最善の道だと考えています。つまり皆さんが見ている幼児の親たちが、「この子にとって一番良いことは、育ちを大事にすることなのだ」と本当に気が付いて子育てしていくと、園に来る子どもたちはみるみる元気になり、落ち着いてくるということです。幼児期の子どもの育ち直しは、ただかか1歳か2歳戻るだけだからです。情報の洪水とも言える21世紀の日本社会において、幼児期の育ちの大切さを理解することは、子どもの将来がどうなるかということに直結する重要な問題です。その意味で、冒頭にお話した子育て支援がいかに大事なことを強調しておきたいと思います。そのために幾つもの施策が講じられようとしています。それを現場の皆さんの悩みや問題点と突き合わせ、今日の学びとも結びつけながら、どのような子育て支援が

求められているのかを考えていただきたいと思います。

9. 触覚経験の重要性

こうして話をしてくると、「育」とは何かが気になりませんか。教育は土台と上屋の関係であることはお話ししました。では、土台を育てるとはどういうことなのか。そのことが分かってくると、自分たちの仕事にもっと見通しが持てると思います。「育」については幾つものことを考えなくてはなりません、まず何よりも大事なことは、子どもたちの身体の育ちです。その中でも特に大切なことは、子どもたちが自らの感覚をいっぱい使いながら体を動かすこと、すなわち感覚器官と運動機能の育ちを大事にすることです。感覚器官は外界からのさまざまな信号を感じ取る力で、運動機能は自分が感じたことを発信する力です。この感覚器官と運動機能という受信と発信の力が子どもたちの中でどのように育つかを知ることが、子どもたちの身体を育てる上で一番大事なことです。

感覚器官といえばそれは五感だとすぐ分かると思います。五感とは触覚、味覚、嗅覚、聴覚、視覚ですが、その育ちを理解するには人間の5本の指で説明するのが良いようです。人間の五感とは人間の5本の指によく似た構造をしているからです。5本の指の中には1本だけ特別な指があります。それは親指です。親指は、他の全ての指と向き合っており、あいさつすることができるただ一つの指です。それは五感の中に一つだけ特別の感覚器官があることと似ているのです。それが触覚です。触覚を丁寧に育てていくことによって、その他の味覚も嗅覚も、聴覚も視覚も豊かに育つという関係になっており、それができるのが幼児期なのです。子どもたちが美しい音楽を聴いたり、すてきな絵画を見たりすることはとても大事ですが、それを力として定着させていくためには触覚経験を豊かにさせることが大変重要なのです。

そのことを著したのが『子供の「脳」は肌にある』（山口創 光文社新書）という本です。子どもの触覚経験は手だけでなく、全身で感じるものです。これから夏になると子どもたちはプールに入るのが大好きですが、それは全身で水の心地良さと楽しさを感じるからです。全身で触覚経験をすることで、子どもたちは味覚も嗅覚も視覚も聴覚も刺激されていくのです。これを共感覚といいます。感覚器官は全てがつながっていて、一つの感覚器官が豊かに育つことで



他の感覚器官も刺激されて育つのですが、この共感覚が強く働くのが幼児期であり、子どもの感覚器官の育ちにとっては非常に大事な時期です。そのためにも皆さんは子どもたちがいろいろな物に直に触れる機会を重視し、保証しなくてはなりません。

2歳児は水で育ち、3歳児は砂で育ち、4歳児は泥で育つといます。子どもたちは本来、自然の水や砂や土や泥に触れ、虫や木や草などに触れ、玩具や本などに触れることが大好きです。そして人間に触れ、昆虫に触れ、魚に触れ、動物に触れることもとても好きです。保育ではその経験をいかに豊かに保障し、それを楽しんでいくかが大事なのです。今の子育ては、ともするとプラスチック製品に頼ってしまいますが、プラスチック製品をいくらそろえても、どれもみな同じような触覚経験にしかありません。しかし、木製のもの、竹、桜の木、カシの木と、みんな微妙に違う触覚体験に結びつきます。

50年以上前の私の子ども時代は経済的には貧しい時代でしたが、身近にプラスチックがなかったので本物の木や金属などに触れる「豊かさ」がありました。その頃は「アメリカ生まれのセルロイド」と言われ、プラスチックはとても高価なもので、めったに触れることが出来なかったのです。小学生にもなると私たちは自分で木を削って木刀を作ったり、ゴム鉄砲を作ったりして本物に触れて、作っていました。その中で、カシの木を削ろうとしても簡単にはいかないことや、竹を削る時には気を付けないととげが刺さるといったいろいろなことを感じ分けただけでなく、それを加工する技も見よう見まねで身につけてきたのです。

本物に触れて子どもたちが育つことは大事です。もしも保育園や幼稚園で子どもたちが使う物を買う時には、どうしたらできるだけ安く本物が買えるかが勝負です。そうした条件整備が、子どもの触覚経験を非常に豊かにします。そして、そのことによって、例えば音感が鋭い子は更に音感を磨くことになり、色彩感覚が豊かな子の色彩感覚ももっと豊かになります。ひょっとすると将来はコックさんになるのではないかとと言えるほど味覚が豊かな子も、触覚経験を豊かにすることで更にそれに磨きが掛かるのです。子どもたちの感覚器官を豊かにしていくことの中には、触覚経験を豊かにすることがあるということをぜひ知っていただきたいのです。そして、運動機能、感覚器官の育ちを考える時には、共感覚ということを入念に入れて、触覚経験の大切さを理解して





いただきたいと思います。

運動経験については、寝返りを打ったり、ハイハイをしたり、つかまり立ちをしたりという子どもの運動が、お兄ちゃんやお姉ちゃんの様子を見たり、先生たちの様子に興味を感じ、それに憧れて模倣するという点が重要です。「3歳までは親元に」という三歳児神話がまだ一部で信じられていますが、遊べる地域の崩壊と少子化が進む今日の社会では、全ての子どもが産まれたら保育を受ける権利を保障されることが大切だと思います。保育所に行けば異年齢のお兄ちゃん、お姉ちゃんたちのいろいろな姿を見ることができますし、それを見て興味を持ち、憧れてそれに近づこうとして動くのです。このことが子どもの運動機能を活性化させてくれるのですが、そういうモデルを身近に見られる環境が必要なのです。保育士や教師たちは、自分の言動が子どもたちのモデルになるかもしれない存在ですから、子どもたちにすてきな自分を示す技や力を磨くことが大事になります。自分自身が子どものモデルとして楽しく遊びを演ずる力も、やはり身に付けていただきたいと思います。以上のように、土台となる育ちのベースには身体の育ちがあることをしっかりと理解することが重要なのです。

それとともに重要な、もう一つの子どもの育ちが関係の育ちです。関係の育ちは心の育ちにつながるものです。関係の育ちを見る時に大切なのは、縦の関係、横の関係、斜めの関係という三つの関係です。縦の関係は、主に親子の関係と師弟の関係を指す言葉であり、横の関係は、子どもたち同士の関係、そして斜めの関係は、友だちの送り迎えをするあの子のおじちゃん、おばちゃんたちとの関係、あるいは年の離れたお兄ちゃん、お姉ちゃんたちとの関係のことをいいます。

縦の関係の特徴は、逃れることができない関係だということです。逃れることのできない関係の中でも親と子の関係は、子どもたちにとって死活的な意味を持つ重要な関係です。今、国連が日本の子どもたちの状態を心配して、日本政府に対して3回にわたる勧告を出していますが、その中では「驚くべき数の子どもが情緒的幸福度の低さを訴えていることを示すデータに留意し、ならびにその決定要因が子どもと親および子どもと教師の間の関係の貧困さにあることを示すデータに留意する」と言っています。すなわち、逃れられない縦の関係が子どもたちにとって相当なプレッシャーになり、ストレスのもとになって





いることを、日本の子どものデータが示しているということです。私たちはこの事実を、重要な縦の関係が危機に瀕している状況として認識しておく必要があります。

既にお話ししましたが、縦の関係が子どもにとって危機的なのは、子どもが育つ時期に、親や教師が子どもの育ちを後ろから支えるのではなく、何でも子どもに教え込もうとして、子どもに大変なストレスを与える関係になっているからです。特に6歳までの幼児たちに責任を持つ専門家の皆さんには、育ちを支えることの大切さを認識し、専門性を培っていただきたいと思います。逃れられない縦の関係だからこそ、上からの教え込みは相当なプレッシャーをかけることを意味するのです。子どもの意欲を引き出すような育ちの支援をどのように保証していくかということ、ぜひ研究していただきたいと思います。

横の関係は、友達同士の関係です。園で遊んでいる子どもたちの歓声を聞いてるとほれほれますが、そこで育まれる矛盾いっぱい横の関係が非常に重要であることを皆さんはよくご存知だと思います。ここでは特に、遊びの中でこそ子どもたちの横の関係が育つことを強調しておきたいと思います。

そして斜めの関係ですが、それは近所のおじちゃんやおばちゃんたちとの関係です。ここでの特徴は子どもが選べる関係だということです。子どもたちは自分の好きな人に近寄り、苦手な人を遠ざけます。これはどちらも大事です。なぜなら、人を遠ざける、または人に近づくことは、自分で判断して人との距離を取るというすごい力の表現だからです。しかし最近、その斜めの関係が非常に乏しくなっています。

そこで私は、保育園での保護者たちの存在が重要だと考えています。保育園や幼稚園に来る親にとって、関心は自分の子どもだけになりがちです。しかし実際はどの親も他の子どもたちに見られる存在だということです。他の子どもの中には「あのおばちゃんの子もだったらよかったのに」と、うらやましく思う子がいるかも知れません。あるいは「あのおばちゃんの子もはかわいそう」と感じているかも知れないのです。これこそが、子どもたちが距離の取り方を心の中で学習していく非常に大事な経験なのです。

私自身の子どもの時代の話で恐縮ですが、近所の八百屋のおばちゃんが優しく、いい時期に行くと「ミカンが入ったよ」と言って1個ただでくれました。ところが、魚屋のおじちゃんはどうさくて、顔を見ればがみがみ注意するので



す。だから友達の家に行く時には、今日は何かくれるかなと思いながら、遠回りでも八百屋の前を通ったのです。そうして斜めの関係をいつの間にか学習して、自分の行動を律するようになってきました。だから魚屋の前を通れば近道だと分かっているけど、そこは外して遠回りして行くという知恵も育ったのです。

こうして子どもは、友だちの保護者であるいろいろなおじちゃん、おばちゃんをよく観察しています。「あのおばちゃんはすてきだな」「あのおばちゃんの子どもになったらどんなにいいだろうな」と憧れたりしています。そして、いつの間にか話し方までまねするようになるなど、いろいろなことをやっています。学校の先生もそうですし、保育士もそうです。大好きな先生と苦手な先生を、きちんと子どもは感じています。大好きな先生にはみんな寄っていくのですよね。いずれにしても、そういう子どもの選ぶ力が育っていくことが大事で、園にいる先生はみんな必要な先生なのです。子どもから距離を取られることは寂しいですが、そうやって子どもが学習していける斜めの関係に価値があるのです。保護者会は飾りではありません。何かの時に寄り合って、いろいろなおばちゃんの姿を見て、子どもと関わるができる機会を持つと、それが子どもたちの関係を育て、心を育てます。人との距離の取り方が、子どもたちの中にきちんと育っていくのです。これも「育つ」ことの中身であり、教えて身につくものではありません。

最後になりますが、身体の育ちと関係の育ちに次いで育つものが自我の育ちです。自我の育ちとは、子どもの心の中に「私」が育つことです。子どもたちが自分のことを「私」と言うのは年中さん以後のことです。小さな子どもたちは、例えばアイちゃんであれば自分のことを人から呼ばれるのと同じ「アイちゃんね」と言うようになりますが、「私」はその後に出てくる一人称です。いつも人の顔色をうかがって、自分の気持ちを抑えている子どもたちの中には、その「私」が育ちにくい子が少なくありません。そこに自我が抑圧された心を見ます。それはとても寂しいことです。「私はそれが嫌だ」と言えるような、または「私はこれをした」と自分の要求を出せる心の力が、「私」を育てるのです。保育士たちはよく「子どもが自分を突き出せるかどうか」と言いますが、それが要求を出す力であり、その育ちを励ますことによって子どもの自我が育つのです。





以上に見てきたような「育ち」が現在の子育てでは非常に軽視されており、「教える」ことがあまりにも大きくなり過ぎています。その中で現れている最大の問題は、体のひ弱であり、人との距離の関係を取りにくくコミュニケーションがうまくいかない心のひ弱さでもあります。それに加えて、自我の育ちの弱さがあります。そういう子どもたちの苦しみは、特に思春期に差しかかる頃から深刻な現れ方をします。その子どもたちは『「私」が何ものか分からない』と言います。カウンセリングの現場で「何で生きていなくてはいけないのですか」「何故人を殺してはいけないのですか」という言葉を子どもたちからよくききますが、その言葉からは、自分が生きている実感が湧かない、抑圧された自我の苦しさを感じます。そこで「そこが君の悩みなんだね」と言いながら、対話を重ねていきますが、その子の中に「私」と言えるものが十分に育ち上がっていないことの辛さを訴えていることがよく分かるのです。

土台としての身体、関係、自我がしっかりと育つのは幼児期の0～8歳であり、その育ちこそこの時期における中心的課題なのです。そしてこの大変重要な課題は、学校の教師の専門性とも違う、まさに幼児期の保育を担っている皆さんの専門領域の問題です。かつてはそんなことは言わなくても済んでいた子育てが、今日では大変難しくなっています。まるで「早いことは良いことだ」というかのように、幼児向けの教え込みの教材やグッズが出てきているからです。その中で行われている子育てによって「育」が押しつぶされそうになっています。そのことの深刻な意味を知っていただくためにお話をしてきましたが、その状況から子どもたちを守り、育ちなおしを可能にする保育が増えて、子どもたちがもっと元気になって欲しいと考えながら、仕事をさせていただいています。

本日はご清聴有難うございました。